いろいろなことを教えてくれる子どもたち ③

村石　京子

保育園ごっこ

私どもの園は大学の附属幼稚園ですので、毎年お茶の水女子大学の学生が教育実習に来る期間があります。四週間の教育実習の最終段階において、実習生は全員一人で級を担当して研究保育を行なうことにしています。研究保育は先ずプランニング、そして日案作成をし、そして当日は一日の保育を実施し、その後で実習生全員と附属幼稚園の職員全員が参加して保育研究会および批評会を開き、保育に関する種々な話し会いを行なうことを定例としております。

そして今年も研究保育の日となりました。実習生は数週間にわたる保育実習の成果をこの日に結集するべく、熱心に保育を行なっています。子どもたちも自分たちのいうことを何でも受け入れてくれる優しいお姉さん先生、仲間同士みたいな気がるな雰囲気をもち、元気潑剌とした実習生が大好きです。しかし、実習生には夢中になればなるほど、全体を見るゆとりがなくなってしまう傾向がどうしてもありがちです。目の前にいる子どもだけをみるのでなく、いつも級全体の子どもの動勢を把握しているようにと、頭の中ではよくわかっているのに、実際の保育の中では傍の子どもとばかりかかわっていて、離れたところの子どものことには眼がとどかないことが時折出てきます。そのような場合でも、子どもたちは四才後半から五才になると、友だち同士の結びつきが高まってきていますので、大人とのかかわりあいがあまりなくても一日位なら普段とかわりなく落ちついて遊ぶことが出来ます。けれど三才児の場合は、友だち同士の関係はまだ淡く、友だち同士で遊んでいる場合でも、そこには大人のしっかりし

た配慮が必要であり、それに支えられていなければ遊びも長くは続きません。

三才児の級では、数人の子どもたちは今日の研究保育の担当者と一緒にいて室内で製作をしたり、庭で「あぶくたった」などをして楽しく遊んでいました。実習生も一生懸命子どもと同じように走ったりしています。ところがそこに加わることの出来なかった子どもたちは、その時間が長くなってくると次第にあまり活潑に遊べない状態になってきました。そうした三才児の心の状態が読みとれるだけに気がかりながら、今日は観察者の立場にあるので手を出すのは控えているとき、折しも五才の男の子が自分たちでつくった大きな恐竜を持って庭へ出て来ました。その恐竜が自分たちの方へ近づいてくるのを見たとたんに、三才児の遊びはさっと浮き足だってしまいました。そして後はもう、なかば面白く、なかば恐れてただただ園庭を右往左往している状態となってしまいました。と、たまたまその様子を見ていた同じ五才児の級の女の子が二人、タイミングよく助け舟を出してくれたのです。

うろうろと走って来た三才児を呼びとめて、二列に並ばせ手をつながせています。きっと恐竜のいない山の方へ行きましょうということになったのでしょう。みんなが上手に並べたところで、さあ出かけましょうと歩き出したとき、リードをとっていた五才の女の子はちょっと後をふりかえって見ました。そして三才児の部屋の入口のところで、まだぐずぐずしていた女の子が一人いるのを見つけました。五才の女の子はいそいで引きかえすと、その子にも声をかけ、列の一番後に並ばせ手をつないでうまく仲間に加わったところまで見とどけると、先頭に立って山へ向かって出かけました。取り残された年少者がいないようにというその細心な気づかいに、観察の立場をとっていた私たちは「まあ」と驚いたものです。やがて山を二〜三周して来ると、「子どもの家」とよんでいる別棟になっている建物にみんなで入っていきました。そこは畳の部屋で外ばきをぬいで上るのですが、入口で靴を上手に揃えてぬぐように教えてくれました。そして部屋の中ではまるくなって坐らせ、ままごとのお茶や御飯をみんなに配っ

ています。その行き届いた世話の仕方に感心しながらも、せっかく出来た子どもたちだけの社会に割り込むことは遠慮して、そっと見守っていました。

どんな展開があったのでしょうか。この部屋での遊びが一段落したらしく、また庭へ出て来ました。五才児のリードで三才児は二列に上手に並びました。「何をしているの？」と声をかけてみると、「保育園ごっこよ」という答です。あ、なるほどこの五才の女の子は先生の役割をとっていたわけです。それでどうも並々ならぬ気づかいをして年少者に接していたのを知り、何とも嬉しくほほえましくなりました。二才年長の女児たちは、三才児に対して精一杯の心配りといたわりをもって行動し、本当の先生も及ばない程の優しさを見せてくれています。三才児は友だちと手をつなぎ、五才児のリーダーの後から楽しげに今度は違う道を通って、山の探険に小走りについて行きました。

やがて遊び終って昼食となり、帰りの時間を迎えたとき、三才の級の男の子がふと言いました。「あーあ、今日は楽しかったな。だって大きい組のお姉さんが遊んで下さったもの。」いつもの級の友だちと遊ぶのとは一味違った遊びに、新鮮な味わいが強く感じられたのでしょう。異年令によるグループ遊びは、三才児は三才児なりの受けとめ方があったようですし、随分いろいろなことも教えてもらいました。そして観察していた私たちも、子どもの細やかな心づかいを見て五才児はこんなことが出来るし、三才児はこんなことを喜ぶのだということを改めて教えられる経験でもありました。実習生はまた、思いがけない形で自分の予想とは異なった幼児の活動がおこるということを知る体験ともなりました。

そしてまた、リーダーシップをとった五才児は、帰りしなにこう言ったそうです。「幼稚園の先生って随分大へんなのね。」この子が自らかって出て経験した「一日先生」、その中で彼女もまた他へ対するいたわりなどや種々のことを自分の発意で行ないながら、自らも学んでいった体験学習の一日でもあったようです。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）